

*** “選良”は人を動かす

「東日本大震災の被害を、数字を挙げて説明しつつ、『まだ東北で、あっちの方で良かった。・・・首都圏あたりだと莫大、甚大(な被害)だったと思う。』と述べた。」

この発言、こともあろうに復興担当大臣が、自身が所属する派閥のパーティで発したものである。この事実が報道されるや否や反響は凄まじく、被災地の方々の悲嘆、憤慨は勿論のこと、多くの国民が驚き、あきれたことであろう。同志の前で「何気なく発言した」言葉だからこそ本音だったといわざるを得ない。

当の本人は謝罪会見後、(国会運営に影響することに責任を感じて)大臣辞任を余儀なくされたが、果たして“選良”としてはどうあるべきなのであろうか。地元選挙区である佐賀県民が発した以下の言葉に尽きると思われるがいかがであろう。

「議員の資格ではなく、人間としての問題。お粗末としか言いようがない。東北の人に謝りたい。」(以上、発言は平成 29(2017)年 4 月 27 日付日本経済新聞朝刊 43 面)

ところでこの御仁、つい数週間前の定例記者会見でも、福島原発事故対応に関して発した「自己責任」発言が物議を醸したばかり・・・そういえば 21 世紀早々の頃、国土交通大臣政務官の一人として在任時にも不遜な姿勢を感じとったのは筆者だけではなくであったであろう。

のちに、同じ政務官在任時に北海道担当として尽力された長野選出の現党参議院幹事長氏や愛媛選出の現参議院議院運営委員長氏(いずれもイニシャルは Y である)は、穏やかな人間性に理想を秘めてことに当たっておられた姿が今も目に浮かんでくるのであり、北海道にとっても我が国にとっても頼もしい限りである。

人はそれぞれではある。このところの政府の不祥事に際して誰かが言っていたが、「(反省を口にしても)人は簡単には変わらない。」然りである。選ばれたのであるから政治家の言うことはどんなことも通用するのが当たり前、と勘違いしている向きが近年眼につくのは大いなる心配ごとである。

さてさて、本来、“選良”に期待されているのは、人々に方向を示し、説得して実現すること、賛同を得てことを成し遂げていくことであろう。それが仕事であるから政治家は大変なのであり、誰でも思い付きでなれるものではないはずであった。従って、「話が上手い」必要はない。挨拶やスピーチに長けているに越したことはないが、何より正面からきちんと話すことができる人であり、嘘偽りのない信頼感が求められる。話を聴いて人が感動し、動き出さないと何事も実現しないのである。伝えるべきことと伝え方が重要であり、そして人間としての器量が欠かせない。

もとより“選良”の集まりとはいえ、人の批判ばかりの党首をいただく政党には、多くは期待できないであろうし、国の行く末を付託することにはならないのが道理である。齢を重ねると、増える一方の人生の後輩諸氏には注文ばかりが増えていく。我が身の来し方を振り返ってこの辺にしておくことにしよう。

冒頭に記した発言に類する“東京ファースト”の行き過ぎ、否、奢りともいうべきことが、阪神・淡路大震災の最中にもあった。平成7(1995)年1月17日早朝発災後、その翌日の朝日新聞朝刊3面に掲載された記事のことである。「この地震が東京で発生したらどんなことになるのか」という類の特集であった。

いうまでもなく被災地は、まだ多くが死に直面している状況下であり、安否確認もままならない現状が伝わるなか、国民等しく心を痛め、自身に何ができるのかに心を砕いていた、その時、そのタイミングでのことある。当時、防災に携わっていた筆者らは記事の唐突さ、あまりの無神経さに唖然とした記憶がある。現地への支援策を具体化しつつも数日後、この時期に、このような記事を集めた意図はどこにあるのか、当該新聞社に質問投書したところ、公にまともな言い分などあろうはずもなく、反省・撤回・謝罪記事は勿論なく、言い訳がましく返信があっただけであった。明治12(1879)年、“被災地”大阪で創刊した同紙創業者は、どんな思いであるだろう。

この記事、大衆の公器としての役割、バランスを欠くどころか、自己中心の“使命感”には被災地やそれを見守る国民への思いやりなどは微塵も感じとることはできない。まして、良識ある都民を含め国民大多数の賛同を得ることなどあり得ないことであった。こうした“東京ファースト”の風潮は近年、様々な場面で見受けられ、我が国のありよう、行く末に一抹以上の不安を感じるのは筆者だけではないだろう。

20170427 追記

この度の“超ど級”(特別警報級)と予想された台風10号一過の翌早朝のこと。その前に来襲した台風8号、9号が通過海域を攪拌していたため海水温が下がり、結果として、10号の成長が“大型で非常に強い勢力”の台風規模にとどまり、被害も限られたものとなったことは不幸中の幸いであった。

といっても並以上の台風である。被害が小さめに済んだのは、地元の方々の経験と備えの確かさゆえであったろう。

そんな時に、届いた“報道ファースト”の過剰報道。NHKキャスターの異常な高揚感とは場違いなものと多くの聴取者が感じたのではないだろうか。質問に答える地元の方々の落ち着いた応答ぶりとも好対照で、東京にいて何を目的に興奮し、勝手に騒いでいるのだ、あたかも騒ぎや混乱を煽っているのではないかとさえ思える応答ぶりであった。

まだ行方不明者の捜索が続いているなかで、予報の台風規模が小さくて済んだ解説が番組の最初にされていたが、まず状況を正しく伝えることが使命の報道機関(特にNHK)のこの報道感覚は理解不能である。猛省を望むとともに、基本となる情操教育が求められるのではなかろうか。

加えて、災害の起きやすい国土に住む国民の一人として、彼らには気象をはじめとする防災の基礎を習得しておいてほしいものである。大都会にばかりいると“吹き返し”が起こるのは台風が通過したことを示す現象であるという、田舎の常識が理解されていないようで、背筋が寒くなる思いであった。

20200907 追記